

14 月明かりのヒースの土手

(『シュロップシアの若者』9番)

人里離れた月明かりのヒースの土手

わたしのそばで羊が草を食^はんでいる

昔は十字路のすぐ側で

絞首台の鎖がガチャガチャ鳴っていたものだ

のんきな羊飼いが 月明かりのもと

そこで羊の群れに草を食^はませていて

月に照らされた群れの頭上高々と

首を吊られた男が浮かんで見えたりしたらしい

5

今では 首吊りはシュルーズベリ監獄の中

夜が明けると死んでゆく者たちに

汽笛とレールの軋^まむ音だけが

夜通し淋しく伝わってくる

10

今宵 監獄の中には

眠っているのか 覚めているのか

養^{さい}の目が一つ違えば

娑婆^{しゃば}で安穩^{あんのん}と眠っている輩^{やから}よりましな若者がいて

15

夜明けの時刻^{とき}が告げられると

処刑人の縄が むき出しの首にかけられる

首吊りの輪にかかるより もっとましな事のために

神様が創^はられた筈^{はず}の首

20

命の糸がプツンと切れて

踵^{かかと}が宙に浮く

大地を踏みしめて歩む輩^{やから}と同じくらい

やつを真^まっすぐに支えていた踵^{かかと}が

というわけで これから夜通しここで待機して

夜明けを待つとしよう

25

吊られるやつは 八時が鳴るのは聞けても
九時の鐘を聞くことはない

こうして わが友の安眠を祈ろう
会ったことはないが 百年前
このヒースの土手で月に照らされた群れを見張っていた
のんきな羊飼いたちと同じ安眠を

30

(山中光義訳)